

住宅建設

—スリランカで家を建てる

荒井悦代

スリランカでは国が住宅建設に

積極的だった。古くは人口過密な南部の貧困問題解決のための移住計画であるマハヴェリ・プロジェクトが実施された。現在でも福祉政策の一環として住宅建設は優先課題とされており「一〇〇万戸住宅建設計画」などが継続している。しかし、このようなプロジェクトにより望んだ場所・時期に理想の住まいが得られるとは限らない。

日本での「家探し」とは、主に不動産屋を巡り、広告に目を通すことだろう。マンションでも戸建てでも、予算や通勤・学校・買い物便を考慮に入れつつ選ぶことになるだろう。このとき、我々はあまり建物自体についてよく知らないでも済む。注文住宅にしても、ある程度の要望を伝えた後は工務店にお任せの部分が大いだろう。マンションはコロナボでは普及

しつつあり、特に二〇〇九年の内

戦終結以後、急速に増加しつつあるものの、全国的には一般的ではない。二〇〇一年の人口センサスによれば集合住宅はコロナボ県でも住居の二・三%にすぎなかった。

やはり小さくても庭を備えた一戸建てが一般的である。一戸建ての場合、大規模デベロッパーによる宅地開発・建て売り住宅販売も増えてきた。中古物件を買うことも可能だ。しかし、スリランカで家を持つことは、自ら家を建てることである。日本のように「選ぶ」とか「買う」という感覚ではない。家主は、まさに主人として家作りの全てのステップに関与しなければならぬ。自ら関わることで予算が少なくて済むからなのだが、その代わり膨大なエネルギーと時間を要する。都市近郊の一般的なスリランカ人はいかにして家主に

なるのか。

家の設計は、設計図はもちろん設計士が作成するのだが、家主やその家族の要望やアイデアをふんだんに盛り込むことが可能だ。スリランカの都市部の家の基本構造はブロックとコンクリートなので、イメージがしやすい。こだわる人はとことんこだわることでいいし、滝を流してもいい。そこまではなくても、家を建設したいと考えていた友人らは、すてきなレリーフの欄間（ドアの上部などに飾りを施した換気スペース）を見かけるとスケッチしていた。知り合いの家を訪れては、このタイルはどこからいくらで仕入れたのか、と聞くなど理想の住まいを実現するために常に情報収集を怠らなかつた。

工事を始めるときは、占星術師

に家主のホロスコープをみてもらい、着工に適した日時に家主が基礎石を置く儀式がある。ホロスコープはスリランカの人々はたいいてい生まれたときに作り、結婚や人生の岐路で参照し、適切な時間のご託宣を受ける。このような儀式は着工の時だけでなく、屋根に最初の木材を置くときや最初のドア枠を設置するときなど、適切な時間に家主の手によってなされるべきとされている。そしてそのような儀式の後には特別なお菓子などを職人に振る舞い簡単なお祝いを行う。日本で言うところの地鎮祭、上棟式や建前のようなものだ。

日本の場合、着工して半年もすれば完成する。そして作業は工務店や職人さんにお任せだ。しかし、スリランカの家主は着工後も大変だ。資材の手配は家主の仕事だからだ。家主は資金と相談しながら資材を揃える。日本のホームセンターのように、巨大ショッピングセンターで一式が揃うなんてことはない。値段と品質を比較しながら細々と町の店を巡らなければならぬ。木材も木材屋に行かねばならない。節約したいならば木から調達することも可能だ。

その一方で部品ごとの集積も見



ナーワラの陶器店の店先（撮影：ジェットロ・コロンボ事務所 崎重雅英）

られる。例えば、コロンボ近郊にナーワラという町がある。ナーワラにはタイルや陶器製品の店が数百メートルにわたって立ち並ぶ。ガラス張りの店内にはすすべのタイルや洗面台が並んでいる。しかし、店外にはなぜかしやがみ式の足置き付き便器が陳列されている。内部のきらびやかさと対称的だ。筆者は密かに、秋葉原電気街ならぬナーワラ便器街と命名していた。

職人の手配も家主の仕事だ。腕のいい職人は人気も高いし手間賃も高い、されど質を落としたくないので悩みどころだ。機嫌良くい仕事をしてもらうためには、一〇時と三時のお茶も欠かせない。さらには職人の管理もしなければならぬ。手抜きが心配なのだ。建設会社に管理を任せることもできるが、費用と効果の面からする

と家主が自ら行うことが多い。ここまでしても約束した時間に職人が来ないこともしばしばだ。そうなるとう工期が遅れる。作業の進展を見越して予約していた別の職人にキャンセルしなくてはならないこともあるだろう。

家主は、天候の不順、資材の値上がり・資金の不足に頭を悩ませなければならぬ。例えば近年のスリランカでは、二〇〇四年末の津波後、復興需要によりセメントや木材などの建設資材価格が高騰したことがある。内戦の終結後の現在は北部の復興により同様の事態が発生している。資金が不足すれば職人への支払いや資材の購入ができずに工事はストップする。だから完成までの時間は予測できない。数年にもわたってライフワークのように気長に建築に取り組む人もいる。その間、本業そっちのけで膨大なエネルギーと時間を費やさなければならぬ。職場の人々もそれを承知しているので、疲れていても大目に見てくれる。

家主は工法や資材の善し悪しについても配慮しなければならぬ。家完成する頃には建築に関する程度知識がいやでも身につく。家を建てるのは二度目

という友人のもとにある日、見知らぬ人が訪ねてきた。この人がよく知っているから話を聞きたい、と言われたとか。訪問者と友人は初対面ながら共通の話題についてひとしきり話していったという。

建設中の家にはたいいてい、日本の田畑でみるような「かかし」を見かける。もちろん害鳥除けが目的ではない。スリランカの人々は他人からの嫉妬を警戒する。嫉妬されると良くないことが起こると信じているのだ。赤ん坊のおでこに黒い丸がつけられていているのも、かわいい赤ちゃんを見て羨ましいと思った人の嫉妬心が災いをもたらすとされており、それを逃してけるとされているからだ（だからスリランカでは、かわいい赤ちゃんを見ても褒めすぎではない）。作業現場では、このかかしが近所の嫉妬心を一身に集めて職人や家主らを守ってくれているのだ。作業スペースを幕で覆うのも同様の効果を期待してのことである。

家ができたなら家具が必要になる。家を造りながら家具も同時に作ってしまうことも可能だが、コロンボ周辺で買いに行くならコロンボから南一五キロほどの町、モ

ラトゥワだ。南西海岸は木材の集積地になっており、コロンボに近いモラトゥワは家具の町となっている。家具店に入ると思ったよりも奥があり、筆筒やソファアなども所狭しと並んでいる。作業所も併設されており、オーダーメイドも可能だ。もちろんコロンボでも家具屋はある。家具加工メーカーのなかにはインドに進出しているダムロや、高級家具で知られるドン・カルロスなど選択肢は豊富だ。家にお客を呼んでもてなすことも多いので、応接セツトは心地よいものを買わなくてはならない。

スリランカで家を建てることは苦痛以外の何者でもないように見えるが、人々は楽しんでやっているようにも見える。なんと自分も自分の好きなようにアレンジができるからだろう。手間をかければお金も節約できる。そして時間をかけていろいろと工夫し、苦労することで家に対する愛着も生まれるのだろう。マンゴーの落ち葉が毎日大量に降るのに、家の周りはいつも箒で掃き清められている。

（あらい えつよ／アジア経済研究所 南アジア研究グループ）